「あの、こがねいさっ、いたっ、苦しい！」
「ごめん、加減忘れた……痛っ！」
「ほら言わんこっちゃない、傷開いたでしょ今!?」
「ひらいてないひらいてない、畳におっこってたモデラーナイフが突き刺さっただけ。電気消す前に危険物チェックしといてよ東ちゃん」
「もうやめましょうよ、別に今日じゃなくていいし、今日やる意味ないし、全快してからでも遅くないし、あ、ほら、ご近所迷惑ですここ壁薄いしお隣に筒抜けだしまかり間違って声聞かれでもしたら外歩けな……どさくさまぎれに服に手をかけないでください！」
油断も隙もあったもんじゃない。
手が早いというか手癖が悪いヒモが、勝手に服を脱がそうとするのに抗う。
性急な衣擦れの音に混じる性急な息遣い、他人の手で服を脱がされる羞恥と屈辱にまた顔が熱くなる。
嫌々と首を振り、非力なりに手を突っ張って小金井を押し戻す。
「自分で脱げますから……子供じゃないんだし」
「脱がしたいの」
わがままだ。
「手えあげて」
「……」
「返事は？」
「……はい」
諦めの息を吐き、言うなりに腕をあげる。
降参、万歳のポーズ。
相手はけが人だ、無思慮に暴れまくって傷が開きでもしたら一大事。
我慢、我慢だ八王子東、今だけ耐えろ。
子供みたいに腕をあげ脱がされるのを待つ。
揉みあいに勝利した小金井がほくそえみ、ぼくの上着の裾を掴み、手馴れた動作で引き上げる。
下腹が外気に晒される。
ついで痩せた腹筋、薄く貧相な胸板、左右対称の鎖骨、脆弱な首筋と露出させていく。
首のところでつっかかり、逆さになった上着が顔を覆う。
首からすっぽ抜けた上着を放り捨て、今度は自分が脱いでいく。
暗闇で目が見えないせいで耳が過敏に研ぎ澄まされる。
見えないからこそ想像が逞しくなる。
服がぱさり畳に落ちる。
上半身裸になった小金井が布団に膝をつき、ぼくの方へと手を伸ばし、反射的にびくりと硬直。

ぎゅっと目を瞑る。
強張る肩を手が包む。
風呂場のフラッシュバック、あの時乱暴に掴んだ肩を今度は壊れ物でも扱うように優しく包む。
「……キス……していい？」
ごく小さく頷けば、それを待っていたように、暗闇の中顔が迫る。
肩を掴む手から緊張が伝わる。
顎をそらし、顔を上向け、待つ。
熱く湿った息遣いが顔にかかり、心臓の鼓動が爆発寸前まで高鳴る。
唇に熱く柔らかいものが触れる。
小金井の唇。
思わず身を引こうとするも肩を掴んで阻まれ、今度はもっと深く、強く吸われる。
「！　ん、」
巻き起こる嫌悪感、それを圧してこみ上げる甘い疼き、くすぐったさ。
思い出す一回目のキス、二回目のキス、これで何度目だ？
風呂場ではキスされなかった裸のうなじや肩や背中に一方的にキスされた、これは合意だ、というかふたりとも意識ある状態で合意のキスは初めてじゃないか？
前歯をぶつけないように慎重にキスをする、唇を味わう。
怖い。
本能的な恐怖と拒否感、粘膜をこねあう嫌悪感、他人と接触するのが怖い、怖くて怖くて気持ち悪い、だからこれまで徹底して接触を避けてきた、なるべく人と関わらないようにして生きてきた、だけど今小金井と唇を重ねている、これはぼくの意志だ、受身で流されてるわけじゃない、そう信じたいけど
「……ん、ふあ、はっ、はあ……」
上手く息が吸えない、苦しい。
唇を重ねるだけじゃ足りず、舌を絡める。
最初は試すように遠慮がちに、次第に大胆に濃厚に、たがいの唾液を飲み交わし口腔をむさぼる。声……なるべくだしたくない、聞かれる恐れがある、お隣さんにばれたら生きてけない、ただでさえエロゲの声聞かれて生き恥かき捨てなのに……
横目で隣との境の壁をうかがう、壁沿いに視線をめぐらしガンプラや本棚、机の配置を無意識に確かめる。
そうやって意識をそらしてないと熱に押し流されてしまいそうで怖い、口の中からどろどろに溶けてしまいそうで怖い
「ふあ、あふ、んくっ、こがねいさ、も、や……めてくだ

さ、いっ、息すえなっ……くるし……」
キスが長く続き酸欠状態に陥る。
塞がれた唇の隙間から息を吸う、前歯がせわしくかちあう。
小金井はキスが上手い、対するぼくはへたくそだ、小金井がせっかくリードしてくれても上手く応じられない、無心になるあまり前歯をぶつけてしまう。
唾液の糸引き唇がはなれる。
口腔の粘膜をさんざんかき回し溶かされ、恍惚と目が潤む。
頬の裏側、舌の裏側に性感帯があったなんて知らなかった。
「……やーらしい声。ヤクザにも聞かせたの？」
「聞かせたくて聞かせたんじゃな……いっ！」
へそのくぼみをなめられ、未知の感覚に仰け反る。
小金井は腹筋にそって犬のように舌を使う。
唾液をこね回す音が淫猥に響く。
布団の端を掴み、腹をなめまわされる気色悪さに耐える。
「そこ、きたない……から、やめ……」
「いいの？　でかい声だすとお隣に聞こえるよ」
声を堪えるぼくの表情を意地悪く笑みを含んだ目で観察しつつ腹をくだっていく。
ジッパーが噛みあう音。
「……ちょっとでっかくなってる」
「言わないでください……」

「……明るいとこで見たかったな。知ってる？　東ちゃんのここ、キレイなピンク色なんだ。赤ちゃんみたい」
「どうせ童貞です……妄想とエロゲだけが友達です……ち、小さいし……なんか、色々とアレだし」
こないだ剥けたばかりだし。
風呂場で股間に手を回され、無理矢理剥かれた屈辱的な記憶がぶりかえし、腹立ち紛れと照れ隠しで口走る。
「こ、こがねいさんのも、さわらせてください」
「え？」
……バカか、ぼくは。

（以下続）